



「高齢化社会」

下仁田中学校3年 諏訪 暁子

私の家には祖父がいる。祖母が三年前に亡くなり、母屋で一人暮らししている。離れている家に住んでいる私と父、母は夕食のときだけ母屋に行く。

夕食を食べていると、祖父は私に話しかけてくる。祖父は最近耳が遠くなり、私の声が一番聞こえやすいので、たくさん話しかけてくる。中学校に入りたての頃、テレビを見ているときに話しかけてくるので、受け答えるのが嫌だった。何度も同じ話をするし、テレビを全然見られないからだ。たまに知らない人の話をする。だから私は祖父の話し相手をするのが苦手だった。だんだん私は、祖父の顔を見て話を聞かなくなり、「うん、うん、そうなんだ。」と話の内容がわからないまま相づちだけ打ったりしたこともあった。

それは、夕食のときだけではなく日常でも祖父が、「あれはおじいちゃんが植えたんだぞ。」と草木の話をしてきても、「へえー」で終わらせてしまったり、「西瓜ができたんだ。見に行こう。」と野菜などを見るのに誘われても、「後でね」とそっけなく返してしまいうことも多くなった。夕食も母屋に行って食べるのが面倒になり、住んでいるほうの家で済ましてしまいがちになった。

ある日私は、一人でご飯を食べているとき、とても寂しくなった。いつもよりご飯がおいしく感じなくて、食べていてもどんどん心が暗くなつていくだけだった。しかし、祖父は家でも一人だし、ご飯も一人のときが多い。そして、私の場合は母に話を聞いてもらえらるが、祖父は話し相手がいらない。とてもかわいそうでもとも申し訳なかった。私は、なんて心ない行動をしてしまったのだろうかとう自分に腹が立った。私が祖父だったら、悲しいし寂しいに違いない。小さい頃から、「自分がされて嫌な

ことは、相手にしてはいけない」と言われてきていたのに、全く実践できていなかった。私のように、高齢者の方に冷たく当たってしまう人はいくのではないかと私は思う。

今日は、少子高齢化が問題である。高齢者が安心して過ごせる国にしていけないといけないのに、身近にいる祖父に優しくできないで、他のお年寄りのことを考えた社会などできないと思った。そして、友達や他の人のことを考えられる人になれないと思った。

今私は、祖父に頼まれごとがあつたら率先してするし、話の聞き手にもなっている。わからない人や、わからないことが話の中に出てくると、母に助け船を出してもらいながら、ちゃんと目を見て話を聞けるようになった。嬉しそうに話す祖父。それを見て私も嬉しくなった。以前よりも祖父との距離が縮まった気がした。畑での野菜の種類、いつ頃取れるかなど、たくさんのお話を教わった。畑仕事を祖父を見てとても尊敬した。心の底からかっこいいと思った。農業がかっこよかったわけではなく、七十九歳で力仕事を淡々とこなす祖父は、輝いて見えたからだ。

このように、高齢者に対して少しでも心を向けてみてはどうだろう。私のおよそ五倍以上もの時間を生きている人々は、たくさんものを見て聞いてきた人生の先輩として敬うべきだと思う。今の便利な生活は今のお年寄りの世代が頑張ってきた結晶ではないだろうか。

私は、もっと祖父とコミュニケーションをとっていきたい。たくさん思い出を作り、それに対しての思い出話を祖父と一緒にできたなら、もっと祖父は喜ぶ楽しんでくれるだろう。今までの「ありがとう」の気持ちを込めて優しく接し、気持ちよく過ごしていける未来に私はしていきたい。



下仁田中学校2年 蟻坂知佳